

自己評価報告書

平成 23年 4月 30日現在

機関番号：13601

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2008～2011

課題番号：20730331

研究課題名（和文） 現代保健医療福祉における「予防」実践に関する臨床社会学的研究

研究課題名（英文） Clinical Sociology on “preventive action” in present-day Japanese health, medicine and welfare systems

研究代表者

井口 高志（IGUCHI TAKASHI）

信州大学・医学部・講師

研究者番号：40432025

研究分野：臨床社会学

科研費の分科・細目：社会学・社会学・

キーワード：予防、ケア、認知症、

1. 研究計画の概要

本研究は、中高齢期の医療・保健・福祉領域における「予防」志向の強まりの内実と社会的意義（功罪）、さらに、その志向が中高年期（何らかの疾病・障害を得て生きる時期を含む）の人びとの生や、その支援に関わる人々に対してもたらす影響について、社会学的視点・方法を用いて明らかにしていく。具体的には以下の(1)(2)を行う。(1)医療・保健・福祉領域全般において、近年とみに強調されている「予防」という発想が、政策化・実践化されていく際の論理とその内実（そして予想される結果）を、医療社会学や社会理論の枠組みを参照しつつ、具体的な対象領域を記述・分析する（マクロ社会学的な分析）。対象は、来年度より各健康保険者に義務付けられる特定健康診断・健康指導の動きと、認知症介護において強調される地域のMCI（Mild Cognitive Impairment軽度認知障害）予防の動き、の二領域である。

(2)上述の実践が、どのような問題性と可能性を有しているのかを、「予防」が語られ導入される社会的コンテクストとの関連で明らかにする。具体的には、いのちや健康という価値と強く結びつけて予防が語られた長野県の佐久総合病院の活動と、予防や症状の遅延、およびその先にある新しい薬の開発が生きる上での「希望」として語られる若年認知症の人と家族、および彼／彼女らを支援する専門職の実践を、フィールドワークやインタビューなどの質的方法を用いて考察する（個別事例を通じた分析）。

2. 研究の進捗状況

これまでの研究では、主に若年認知症の人へのケアに取り組んでいるデイサービスへ

のフィールドワークに基づいて、認知症ケアにおける予防志向の強まりや、医療の役割の強調と「本人中心のケア」と言われるような認知症ケアの理念との関係について考察を行ってきた。予防志向が、ケア現場における実践に与える影響としてはたとえば以下のようなことが見出された。現場において、予防を重視することは、家族や認知症の本人にとって、なるべくなら避けたい認知症という状態に抵抗する手段を獲得できるという当事者にとって重要な意味を持っているが、同時に、認知症の進行という避け得ない現実からすると、逆に衰えを受け容れることが難しくなるという困難を生み出すという面が見られる。現場のケアの専門職は、以上のような予防志向の持つ功罪についてある程度までは認識しており、そこで生まれる困難を緩和するために様々な工夫を行っている。

こうしたミクロな現場でのフィールドワークと同時に、認知症領域を中心に、現在の高齢者政策や認知症ケア実践における予防志向がどういった思想や制度に結実しているのかを考察した。その考察においては、予防への志向が認知症の人や高齢者の社会への包摂に繋がっている一方で、その追求は衰えていくということを承認する社会を作っていく上で困難を生み出すということを明らかにした。

以上のような研究を中核に、ケア研究全体における本研究課題の意義や位置づけを明らかにするといったことにも取り組んできた。

3. 現在までの達成度

②おおむね順調に進展している

資料収集をだいたい終え、研究成果の報告

についてもコンスタントに行い続けているためである。最終年度は当初予定通り、収集した資料をもとに成果報告をしていくことが中心となる。

ただし、当初研究計画に書いた内容と照らし合わせると、特定健診における健康指導という対象や、佐久病院の事例に関してはほとんど手つかずとなっている。これは研究の遅れとも言えるが、本研究の主旨はこれらの対象そのものを明らかにすることにあるというよりは、こうしたいくつかの対象を通じて、現代社会における予防実践という潮流の現れ方を見ることにある。そうした目的に照らし合わせた時、研究の途上において、認知症ケア領域を中心にみていくことが戦略的に妥当であると考えたため、現行の研究の進め方となっている。そうした点からも現在の進行状況はおおむね順調であると判断している。

4. 今後の研究の推進方策

本研究課題は対象を認知症に限らず保健医療福祉全般における「予防」に注目した実践として当初設定していたが、若年認知症における予防実践に関する研究が最もアクセスしやすいことと、昨年末から認知症ケアにおける予防という考え方の展開を見ることのできる重要資料（NHKアーカイブスの映像）にアクセスできることになったため、認知症領域を中心に、マクロな予防志向の強まりと、現場におけるケアや相互行為のあり様との関連を見ていくというところに主眼を置いて進めていく予定である。こうした推進方針の修正は、必ずしも研究の縮小ではなく、具体的な領域におけるモノグラフを突き詰めることで、今後の保健医療福祉の他領域の考察にも資することを目指した選択である。

5. 代表的な研究成果

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計3件）

井口高志、高齢者関連政策の動向—介護政策を中心に、保健医療社会学論集、21(1)、17-24、2010、査読無

井口高志、支援・ケアの社会学と家族研究—ケアの「社会化」をめぐる研究を中心に、家族社会学研究、22(2)、165-176、2010、査読無

井口高志、認知症とされる人と生きる家族介護者、家族看護、7(1) 16-21、2009、査読無

〔学会発表〕（計4件）

井口高志、認知症ケアにおける<医療>の論理——若年および軽・中度の認知症とされる人を対象としたデイサービスの事例から、第81回 日本社会学会大会 2008.11.24、東北大学、仙台

〔図書〕（計6件）

藤村正之、坪洋一、大山小夜、井口高志、横須賀俊司、斉藤雅茂、近藤克則、坂田勝彦、明石書店、『差別と排除の[いま]④ 福祉・医療における排除の多層性』、2010、pp87-122